

聞き難き道

岡本 英夫

仏法は私たちを救う大事な教え。しかし、これを真に聞くことは、様々な意味で困難でもあります。闘いと喜びが、またそこに生まれます。

（一）

アヌルッダも、ブッダ・ゴータマと同じ釈迦族の出身であった。生まれは高貴にして裕福、そして俊秀であった。彼が住む地にも、ゴータマの声望を讃える声が聞こえてくる。同じ血縁につながる釈迦族の若者達の心の中には、血潮をかき立てられるような思いが起こる。

アヌルッダもその一人であった。近くの村にゴータマが来たことを聞いた彼の胸の高まりは、どんなに激しかったことであろう。兄に相談した。釈迦族よりブッダ・ゴータマが出たことは我らの誇りである。我等もまたゴータマに従って出家しようではないかと。

兄も同感であった。しかし、我が家を絶やすことはできない。アヌルッダよ、お前が行け。俺が家を守るから。

早速母に申し出る。しかし、母の恩愛の絆は固い。そなたたち二人は私の最愛の子、どちらを失うこともできませんと。

アヌルッダは母に請い、母はそれを拒絶する。何度も繰り返した後、母が譲る。ではあなたの友人である執政官のバツディヤと共であるならいいでしょうと。執政官に出家などありえぬと母は思ったのだ。

しかし、道の開けたアヌルッダは、バツディヤを説得する。ゴータマに寄せる思いの熱さにおいては人後に落ちぬバツディヤであったが、しかし執政官の職責を放棄するわけにはいかない。その執政官に友人アヌルッダは迫る。君が出家しなければ私も出家できないのだと。

では七年待ってくれ。とても待てない。では六年。長い。では…。とうとう、七日待ってくれと。友の熱意は友の躊躇ちゅうちよに勝った。

後にブッダの教団において大きな役割を果たしたアーナンダ、デーヴァダッタ、ウパ

ーリなど七人の優れた人材が、この時揃って出家した。その主導権をとった者がアヌルツダであった。

これほどまでに、ブツダ・ゴータマを慕い、出家を願い、仏法に帰依したアヌルツダが、大衆の中において大失態をおかしたのである。

ある時、舎衛城しゃえいじょうの祇園精舎ぎおんしょうじゃでゴータマは法を説いておられた。その時は、多くの仏弟子のみならず、在家の帰依者も数知れず集まっていた。その大衆の中で、アヌルツダは居眠りをしてしまったのである。

背筋を伸ばし微動だにせず教えを聞く仏弟子の中であって、舟を漕こいで揺れるアヌルツダの姿は一目瞭然、誰にでもわかる。あのアヌルツダが。あのアヌルツダ殿が。あのアヌルツダ様が…。

兄弟子は意外に思って驚き、弟弟子は当惑して驚き、在家の者はわが目を疑うほどに驚いたであろう。驚きに次いで、毀そしりの思いが皆に起こったかもしれない。そして次の段階、皆が一つのことを思う。ブツダ・ゴータマはどうなさるのかと。

誰よりも、アヌルツダの熱い求道心と、しかし今眠っている事実と、驚き当惑し毀そしろうとする大衆の心とを知っていたのはゴータマであった。師はアヌルツダを、大きく大きく優しく包む。

法を受けて心地よく眠り
心に錯乱あることなし
聖者が説くところの法は
智者の楽しむところなり
そはなお深き淵の水の如く
清澄けがにしていささかの穢れなし
かくの如きの法を聞く人は
またその心清らかにして楽し
そはまた大いなる岩の如く
風がよく動かす能わざるところ

されば毀^{そし}らるるも誉めらるるも
心はために傾き動くことなし

説法の中でアヌルツダを大きく弁護したゴータマは、しかし、説法を終えて彼を呼んだ。道を求める心固い汝が、法座において大衆の中で坐^{ざすい}睡したのはいかがしたことであるかと。

アヌルツダは全身をもってゴータマにひれ伏し申上げる。大徳よ、今日より以後、アヌルツダは、たとい我が身がただれようとも、また我が手足が溶けようとも、誓って如来の前にあって坐睡するようなことはいたしませぬと。

このことを誓って以降、アヌルツダは、不^ふ臥^が・不眠をもって自己との闘いを始めた。単に法座にあって眠らないだけでなく、夜も伏すことなく暁に至るまで常坐を貫いたのである。

しかし、仮に心が睡眠に勝っても、身体は勝てない。破綻は、まず彼の眼に現れた。眼病を患ったのである。ゴータマは、懈怠は避けねばならないが刻苦に過ぎることもよくないと諫めるが、アヌルツダは、誓いを破るわけにはいかないと拒絶する。

ゴータマは名医ジーヴァカに治療をさせる。しかし、眠ることをしない眼には快方の道はないと。これを聞いてゴータマは再度アヌルツダに眠ることを諭す。しかし、彼はきかない。そしてついにアヌルツダの眼はつぶれてしまった。だが、肉眼がつぶれても、真実を見る心眼が開けたことは言うをまたない。

これほどの強い求道心を持った人であるから、その求法・聞法の歩みは順調に行くものと思しやすい。しかし、法座の最中に眠ったという一事実が、彼の心を打ちのめすほどに打った。そして彼が断固選んだ道は、眠らないという道であった。強い求道心はどこまでも強い。彼は自らの現実を受けとめ、自らのすべてを使って、ついに真実を見る眼を得たのである。教えを聞くこと、道を求めることはいかに難事であろうか。

（二）

兄のマハーパングカは、頭脳明晰、出家後、程なく阿羅漢の悟りを開く。一方、弟のチューラパングカは、希に見るほど物覚えが悪かった。

先に出家をしたのは兄であった。その明晰な頭脳でブッダ・ゴータマの教えるところをよく理解し、成果をあげた。弟思いの兄は、この素晴らしい教えを弟にも知らせてやりたいと思い、出家を勧める。

兄に勧められて出家はしたものの、チューラパンダカは、兄の期待を裏切ってしまう。ブッダの説かれる教えを何一つとして覚えることができないのだ。

ある時ブッダは、チューラパンダカに、四句から成る一偈を教えた。しかし、何ヶ月たっても覚えられない。精舎の中でも外で仕事をしているときでも、偈文を暗誦している。本人はそれでも覚えられないが、いつもその声を聞いていた隣の人が先に覚えてしまった。覚えられないチューラは、そのたびごとに隣人に尋ねにいったということである。しかし、それでも覚えることができなかった。とうとう兄は、おまえはもう家に帰れと弟を精舎から追い出す。

呆然として佇むチューラをブッダは呼び止め、私によって出家したのだから私のそばにいればよいのだと優しく伝える。そして一本の^{ほうき}箒を与えて言われる。よいか、ここに一本の箒がある。これからはこの箒で掃除をしながら、^{ちり}塵を払わん、^{あか}垢を除かんと唱えなさいと。

塵を払わん、垢を除かん。この短い言葉をも覚えられないチューラパンダカは、^{しょうじや}精舎に集う^{びく}比丘の方々に教えられつつ、この言葉を毎日繰り返す。どんな時も繰り返す。そのうち、言葉を覚えるというよりも、言葉の方がチューラの身体の中に染み付いてしまうというか、いつのころからか、塵とはなんだろう、垢とはなんだろうと考えるようになった。

そしてついに、自分の心の塵、自分の心の垢を見だし自覚し、塵と垢を離れ捨て切ることができるまでになったのです。久しぶりに兄のマハーパンダカが訪ねてきたときには、チューラパンダカの顔は光り輝いていたと言われます。

一句の教えすら覚えることのできない者。その者にとって、教えを領解していく道は、賢くなることによってではなかった。俺が、という思いを離れ、心の塵と垢を知らされ自己を翻されて、愚かな私に撤していくことによって、教えを正しく領解することができたのです。

（三）

父を殺したアジャータサトルは、それが正当の行為であるという前提に立っていたために、なんら罪の意識を持つことはなかった。

しかし、ある時、幼い我が子にできた腫れ物の膿^はを吸っているアジャータサトルを見た母親は、おまえが丁度その子の頃、おまえのお父さんも同じようにおまえの膿を吸ってあげておられた時がありましたよ、と言った。

この一言を聞いてアジャータサトルは、翻然^{ほんぜん}として自らの非を悟る。心に悔熱^{けねつ}を生じ、それ故に身体全体に瘡^{かさ}ができ、瘡から発するにおいは甚だ臭く近寄ることもできなかった。私は父を殺したまさにその報いを受けているのだ。母は種々の薬を持ってきて塗るが、癒えることは全くない。アジャータサトルは言う。この瘡は身体の病ではなく、心の病によるものでしょうと。

人の窮^{きゅうじょう}状につけ込む者は必ずいる。悪性の細胞が体力の弱った善性の細胞を侵略するように。憔悴^{しょうすい}するアジャータサトルの前に、次々と師と名のる者が現れ、教を説く。アジャータサトルの苦しみの次元に直ちに参入せず、我が教えの虜にしようと言をもてあそぶ。どの師の教えも、所詮、責任を自ら担おうとせず、他に転嫁して口を拭おうとする外道。しかしそれも、責任転嫁こそあらゆる人の辿ろうとする道であることに確信をもったの言であろう。

アジャータサトルは困惑する。果たしてこれらが真の教えであろうか。残念ながらアジャータサトルに、真実を判断する力はない。だが一つ確かなことは、いくら外道の師の教えを聞こうとも、病が癒えることだけはなかった。

アジャータサトルを心の底から愛し守っていこうとするのが名医ジーヴァカであった。ジーヴァカはアジャータサトルの父でもあるピンバサーラ王が名も無き女性に生ませた子である。十歳ほど年上であった。初め、宮殿に住んでいたが、嗣子^{しし}アジャータサトルの誕生を受けて宮殿を出、医業を学び、再び王家の侍医として宮殿に帰る。弟である王子アジャータサトル、将来の大王となるアジャータサトルのために、全力をもって働く兄。あの王舎城の悲劇において、母のヴァイデーヒーを殺そうとするアジャータサトルを、身を賭^として止めたのもこの兄であった。

ジーヴァカは申し上げる。アジャータサトル大王よ、父を殺すという大変なことを犯して、しかも平気で眠ることができることなどございませんですよ、さぞかしお辛いことでしょう、と。

ジーヴァカはアジャータサトルの苦しみのその次元に直入し、そこで彼に思いをかけているのである。その真心の温かさに大王は口を開く。仏法を学び罪のない父を私は殺した。このような者は地獄に堕ちると聞いている。お前の言う通り、安らかに眠ることなどできないのだと。

ここでジーヴァカは、はっきりと、大王をブッダ・ゴータマの所へお連れし、み教えを頂いてもらおうと決心する。簡単ではないであろう。しかし、大王の救われる道はこれしかない。自分が侍医として王家の人々の側におり、ブッダ・ゴータマの教えを聞いてきたのも、このことのためであったとも言える。ブッダへの道を勧める教化者ジーヴァカが誕生するのである。

その戦略の緒は、アジャータサトルをしてブッダの教えに出会うための出発点に立たしめることであった。それは即ち、アジャータサトルが今懐く罪の思いに、正確かつ生産的な意味付けをすることである。人は、どんなに悲惨な状況にあろうとも、その現状が持つ大切な意味を知ることによって、必ず立ち上がっていきけるのだ。そこには深い人間洞察力と、真実の価値観がなければならない。それを持ち合わせているのがジーヴァカであった。

大王に申し上げる。あなたは王に対して罪を犯しましたが、しかし、そのことに対して深い慙愧ざんきの心を起こしておられます。天に羞じ人に羞じ、他に羞じ自己はに羞ず。この慙愧のお心こそ、人間として我に帰り、そこから歩み始めていく出発点です。この心が起こらない者は、永遠の畜生道に身を置く者でしょう。

お父上に対して何も思われなかったあなたが、ついに罪の意識を深く懐き、地獄に堕ちること間違いない身であると、ご自身を羞じた。このお心こそが、大いなる世界に向けて歩み始める、我ら人間の痛ましき出発点なのです。アジャータサトル大王よ、どうかブッダ・ゴータマのみもとにお行きになってください。どうかブッダ・ゴータマのみ教えをお聞きになってください。

ブッダを勧めるジーヴァカの熱い心は、張り裂けんばかりであった。数奇な運命を苦境の中に生きてなお自暴自棄に陥らず、人々を助けるための医術を学び、ブッダの教えを尋ね求めてきたジーヴァカにとって、父を殺し苦しむアジャータサトルに仏法を勧め

ること、このことこそが、わが生涯の最大のポイントであった。このことのために、これまでの人生の数々の苦境も自主も忍耐も求道もあったのだ。支えること。友を真実に向けて支えること。

しかし、誠実にして熱い友の願いは、必ず通るものではない。アジャータサトルは躊躇する。ブッダは大良医であり、外道の師とは違うのだとジーヴァカは言う。私の病を癒す医者がほんとうにいるのか。外道の師の教えに納得はできないが、いったいどこが問題なのか。ブッダの教えは外道の師の教えとどこが違うのか。違うことと私の病が癒えることとは関わりがあるのか。アジャータサトルの心は決まらない。

その時、停滞する躊躇の闇を切り裂くように、天より声があった。願わくは大王よ、速やかにブッダのみもとに往きなさい。ブッダ以外にお前を救うお方はおられない。私はお前を怨んでなぞいない。お前のことを憐れみ、真に思っているのだ。いいか、ブッダのみもとに往きなさい。

この語を聞いてアジャータサトルは、心に恐れを懐き、身を挙げて戦慄し、五体を震わせてこの声に応えた。あなたはいったい何者ですか。姿を表わさずに、声だけで語られるとは。

声の主は言う。大王よ、私はお前の父ビンビサーラである。大王よ、ジーヴァカの勧めに従いなさい。ブッダこそお前を救う唯一のお方であるぞ。外道の師に従うことなど決してあってはならないぞ。

これを聞いて大王は悶絶して地に倒れる。身の瘡はいよいよ増し、放つ悪臭も譬えようもない。

この時ブッダ・ゴータマは一部始終をお知りになって、静かにアジャータサトルのためにお待ちであった。入涅槃間近のブッダ、しかし、アジャセの為に涅槃に入られようとしないうブッダ。それは世の一切凡夫のために、待つて待つて待ちぬくブッダの姿であった。

しかしなお、お待ちくださるブッダの心に目を背けてか、アジャータサトルはジーヴァカの勧めに応じない。身の瘡はいよいよ熱く、悪臭はなにびとをも寄せ付けない。ここでブッダは深く三昧に入り、光を放つ。その光は、夜空に青白く清涼に輝く月光のよ

うにアジャータサトルの身を照らし、瘡を癒えさせたのである。

驚いた大王にジーヴァカが答える。大王はかつてブッダが大良医であることをお疑いになられた。だからブッダは、大良医であることを自らお示しになられたのです。これで身の病は癒えた。あとは心の病です。大王よ、ブッダはあなたのことを深く思っておられる。ブッダが衆生を思う心は平等ですが、しかし、罪の重い者にその思いが強いくのはこれもまた当然のことです。ブッダは、あなたのために月の如き光を照らし、道なきあなたに道を示し、あなたを喜ばしめようとなさっておられるのです。その道とは眞実涅槃への道なのです。

ジーヴァカからブッダのお心を聞いたアジャータサトルは、しかしまだ決心がつかない。人がもし無上眞実を求めるために、最も近く縁としなければならぬものは善き友である、というのがブッダの教えである。善き友が側におり、切々とブッダへの道を勧めているにも拘らず、もしこれに応えようとしなければ…。そこにブッダへの道は断ち切れ、待つのは地獄のみである。

ここに至ってアジャータサトルは、ついに重い腰を挙げた。しかしまだ心ははっきりしていない。ふと耳にした話が、依然と大王の心を迷わしているのだ。

ジーヴァカに言う。舎衛国のビルリ王は釈迦族を滅ぼした。ブッダは王に、直ちに火に焼かれて地獄に墮ちるであろうと言った。それを聞いたビルリ王は、火の難を逃れるには水によるがいいと考え、船で海に出た。ところが船火事が起こって焼け死んだという。

クカリ比丘は、舍利弗・目連を誹謗したため、悪瘡を生じ、生きながら阿鼻地獄に墮ちたという。

一方、シュナセッタは、数々の悪事を犯したが、ブッダのみもとに到ることによって罪がすべて消滅したという。

さてさて自分はどうか。未だにはっきりしない。しかし行こう、ジーヴァカよ。一象に二人して乗り、道中我を守ってほしい。地獄に墮ちそうになれば、ブッダの教えを聞いているその力を持って我を助けてほしい。ブッダのみもとへ行こう。ジーヴァカ。共に行こう。

こうしてアジャータサトルは仏陀のみもとに到り、ブッダより丁寧な教えを頂き、ついに無根の信を得、迷惑をかけた国民を救うためには地獄に堕ちてもかまわないと、地獄の受けとめを全く逆転さす者となった。

アジャータサトルの躊躇は長い。自己の罪を真に救う者の存在など考えられなかったのである。ジーヴァカが勧めても、亡き父王ピンビサーラが声になして真情を叫んでも、ブッダの放つ月光によって行く道を照らし示されても、自己の罪を救うおしえのあることを信じられなかったのだ。

しかし、どんなに誤解され、躊躇に思いを止められ、疑いで落胆させられようと、善き友ジーヴァカは、ブッダに向けて友を支えることに身を挺するのであった。まことに、無上真実への最大の因縁は善き友の存在である。

アジャータサトルにとって、教えを聞くための歩みは至難であった。不信による紆余曲折。真実の道は、真実であるがゆえに速やかに受け入れられないのだ。しかしそこに友があり、そのたゆまぬ働きかけによって、ついに大きな岩が動いたのである。

（四）

中国の都洛陽らくようの西門の下にぼんやりと立っているのは杜子春とししゅんです。大金持ちの息子であった彼は、今は寝るところもなく、途方にくれているのです。

そこに一人の殺風景な老人が現れ、杜子春の顔をじっと見て、お前はここで何をしているのだと問います。事情を聞くと老人は、それは可哀相だなあと、しばらく考え、やがて夕日を指しながら言います。この夕日の中に立って、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘って見るがいい。きっと車に一杯の黄金が埋まっている筈だからと。

夜になって掘ってみると、言われた通り、山ほどの黄金が出てきます。一日のうちに杜子春は洛陽一の、玄宗皇帝にも負けないくらいの大金持ちになりました。早速家を買って贅沢な生活が始まります。高価な酒や肉を買い、珍種の花を植え孔雀を飼い、玉を集め錦を織らせ香木を作り、毎夜異国の劇団に演じさせて酒盛りをし、洛陽中の人々が杜子春を訪ね酒席に加わって、大変な贅沢の日々を続けたのです。

しかし、三年もたつと、お金は底をつきます。あれ程お世辞を言って訪ねて来ていた人たちも、今では知らん顔。杜子春はまた家を失い、今日の寝るところもなく、洛陽の

西門にぼんやりと立っていました。

そこへ、またあの老人がやってきます。お前は何をしているのだと。事情を話すと老人は、それは可哀相だのう。ではこの夕日の中へ立って、お前の影が地に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るがいいと。

掘ってみるとまた老人の言う通り、山のような黄金です。杜子春はまた洛陽一の大金持ちになり、毎夜知人友人を集めて酒盛りをする贅沢な毎日を送りました。しかし、これもまた三年もたつとお金が底をつき、人々は去り、家を失います。

三度洛陽の西門にぼんやりと立つ杜子春を見て、老人が三度黄金のある場所を教えようとすると、今度は杜子春はその話を遮りました。いや、お金はもう入らないのですと。ははあ、では贅沢をするには飽きてしまったのだなと老人は杜子春の顔を見つめました。

杜子春は答えます。贅沢に飽きたのではありません。人間というものに愛想がつきたのです。人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追ついでもしますけれど、一旦貧乏になればやさしい顔さえもしてくれません。ですから、もう一度大金持になっても何にもならないような気がするのですと。

そして、私をこのように何度も大金持ちにしてくれるのですから、あなたは大変道德の高い仙人でしょう。そうであるに違いありません。どうか私を弟子にして、仙術を学ばせてください、と強く請うのです。

老人は答えます。いかにも私は峨眉がびさん山に住む鉄冠てつかんこ子という仙人である。そのように正体を明かし、それほど仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろうと、快く願いを受け入れました。

杜子春は大喜び。何度もお礼を言う彼に鉄冠子は言います。いくらおれの弟子にした所で、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな。ともかく俺と一緒に、峨眉山の奥へ来て見るがよい。

鉄冠子は側にあった竹杖を引き寄せ、杜子春と飛び乗ってなにやら呪文を唱え、竹杖はあっという間に空に舞い上がり、遙か峨眉山に向かって飛んでいくのでした。

二人を乗せた竹杖は、間もなく峨眉山へ舞い降りました。そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶

碗程の大きさに光っています。

鉄冠子は言います。俺は用があってあちらへ行くから、お前はここで待っている。多分俺がいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たとえどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと言悟をしる。よいか。天地が裂けても、黙っているのだぞと。

大丈夫です。決して声などは出しはしません。命がなくなっても、黙っていますと杜子春は答えます。それを聞いて安心した鉄冠子は竹杖に乗って遥かな山の空へ消えてしまいます。

杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静かに星を眺めていました。突然空中に声があって、そこにいるのは何者だ、と叱りつけるではありませんか。しかし杜子春は仙人の教え通り、何も返事をせずにはいました。ところが又暫くすると、返事をしないとたちどころに命はないものと覚悟しると、いかめしく嚇（おど）しつけるのです。

爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高くたけりました。後の絶壁の頂からは、四斗^{だる}樽程の白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、みるみる近くへ降りて来るのです。杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。

突然、風の音、雨のしづき、絶え間ない稲妻^{いなずま}の光。暫くはさすがの峨眉山もくつがえるかと思うほど。耳をもつんざく程大きな雷鳴^{とどろ}が轟いたかと思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、まつ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。杜子春は思わず岩の上に身を伏せますが、それでも口を利きません。

今度は彼の坐っている前へ、金の鎧を着くだした、身の丈三丈もあろうという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉の戟^{ほこ}を持っていましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら叱りつけるように、なぜこの山に入ったか言えと迫ります。言わない杜子春を見て、言わなければズタズタに切り裂いてしまうぞと叫び、それでも言わない杜子春の胸めがけ、ついに三叉の戟を刺し、突き殺してしまったのです。

息の絶えた杜子春は、闇穴道という氷のような冷たい風がぴゅうぴゅう吹き荒んでい暗い穴を通過して、森羅殿という立派な御殿の前にやってきました。鬼たちが杜子春を

きざはし
階の前に引き出します。

階の上には一人の王様が、まっ黒な着物に金の冠をかぶって、いかめしくあたりを睨んでいます。これはかねて噂に聞いた閻魔大王に違いありません。階の上から雷のような声が響きました。こら、その方は何のために峨眉山の上へ坐っていた。速やかに返答をすればよし、さもなければ時を移さず、地獄の呵責かしやくに遇わせてくれるぞと、居丈高に罵りました。

それでも唇一つ動かさない杜子春を見て大王は鬼たちに命じます。鬼どもは剣の山の地獄や血の池の地獄や焦熱地獄や極寒地獄の中へ、代る代る杜子春を抛りこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵うに撞かれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸われるやら、熊鷹くまていに眼を食われるやら、あらゆる責苦せめくに遇わされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じっと歯を食いしばったまま、一言も口を利きませんでした。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、この男の父母は、畜生道に落ちている筈だから、早速ここへ引き立てて来いと、一匹の鬼にいいつけました。

二匹の獣を駆り立てながら、鬼はさっと森羅殿の前へ降りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかと言えば、それは二匹とも形は見すばらしい瘦せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母だったのですから。

お前は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞと閻魔大王は言います。杜子春は返答をしません。

この親不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合がよければ、それでよいと思っているのだな。打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ。閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄まじい声でわめきました。

鬼どもは鉄の鞭をとって四方八方から二匹の馬を、容赦なく打ちのめしました。二匹の馬は肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階の前へ倒れ伏しています。

杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思ひ出しながら、かたく眼をつぶっていました。

た。するとその時彼の耳に、かすかな声が伝わって来たのです。心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ幸せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰っても、言いたくないことは黙っておいで。

それは確かに懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあげました。そして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しさうに彼の顔へ、じっと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。

杜子春は鉄冠子の戒めも忘れて、ころぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、お母さん、と一声を叫びました。

気がついてみると杜子春は、洛陽の西門の下にぼんやりと佇んでいました。老人がやってきて言います。どうだな。おれの弟子になった所が、とても仙人にはなれはすまい。

なれませんが、しかし私はなれなかったことも、かえってうれしい気がするのです。そう言って杜子春は老人の手を握り、いくら仙人になれても、私はあの地獄の森羅殿の前で鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳にはいきませんと、その時の心境を述べた。

もしお前が黙っていたら、と鉄冠子は急に厳かな顔になって、じっと杜子春を見つめ、もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶てしまおうと思っていたのだ。ではお前はこれから後、何になったらよいと思うか。そう問うと杜子春は、何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりですと、今までにない晴れ晴れとした調子で答えた。

ではおれは今日限り、二度とお前には遇わないからと歩き出した鉄冠子が急に足を止めて、杜子春の方を振り返ると、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住むがよい。今頃は家のまわりに桃の花が一面に咲いているだろうと愉快に言いました。

芥川龍之介の作品『杜子春』です。じつに面白い作品ですね。私はこれを思い切って、聖道門の歩みの行き詰まりを知った男の物語、と読んでみたいと考えています。

この作品の最大の核心はどこか。もちろん、「お母さん」の一言でしょうね。そして、それを言い換えた言葉があります。だからそこが核心の言葉だと言ってもいいと思いま

す。それは、ごく終わりの方、「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思っていたのだ。」の言葉です。

仙人が杜子春の命を絶つということは、杜子春が人間ではないからだ、ということでしょう。いくら鞭に打たれても我が子の幸せを最優先しようという母の思いに触れて、それでもなお、口を利かないという行を貫くならば、それは最早人間ではない。人間は恩愛を自ら冷たく断ち切ってまで悟りを開くところに救いがあるのではない。恩愛を断ち難いのが真の自己であると、自身の事実^{おんあい}に立ち返らねばならないのだ。

恩愛を断ち切ろうとする、即ち、非人間的な存在となつて悟りを開こうとしている顛倒^{てんどう}の自己に杜子春は気がついたのです。そして、これからは、「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」というのが、自己が自己になつた、自己が真の自己に立ち帰った姿でしょう。

最後に老人が杜子春に家と庭を与える。蓮の花ならぬ桃の花が庭一面に咲いている家を。これが浄土であることは言を待たないところですね。

杜子春にとって、真の悟りへの道は大変な歩みでした。その根本は、口を利かないことが自分にできると思っていたところにあります。この無言の行をどんな事態の中でも貫き通せば悟りは開けるのだ。そう思っていたのです。しかし、鞭に打たれる瘦せ馬の母の語る真情に触れたとき、母との恩愛のつながりの事実が、無言の行を貫けるという思いの事実を超えたのです。煩悩成就の我が身であることに徹することが出来たということでしょう。

帰るべき人間の真の事実がそこにあつたのです。「おかあさん」この言葉を発するまでが、彼の迷いの旅路であつた。「お母さん」と言葉を発するところに、彼の聖道の思いの敗北があり、真の自己、浄土を生きる自己の誕生があるのです。

「お母さん」、じつにいい言葉ですね。「おかあさん」とは、「南無阿弥陀仏」の、人間語的アレンジ版の言葉でしょうか。